

深谷賢治氏の藤原賞受賞に寄せて

小野 薫

京都大学数理解析研究所

深谷賢治さんが第 53 回藤原賞を受賞されました。誠に喜ばしいことで、深谷さんには心よりお祝い申し上げます。3 年ほど前に、朝日賞を受賞された折に数学通信にお祝いの文章を書かせていただきました。その後の研究のご進展についても深谷さんの講演をお聞きになられた方も多くおられると思います。深谷さんは講演や論文を通して多くの研究者に影響を与えて来られました。特に若い方々は大いに刺激を受けたのではないのでしょうか。

深谷さんは啓蒙的な書物から専門の論文まで多くのものをお書きになっています。私が深谷さんとの共著論文を初めて書いたのは Warwick 大学に数ヶ月滞在していたときでした。私が書くのが遅いこともありますが、私の分担部分を書いている間に岩波の入門講座の「双曲幾何」の草稿をほぼ書き上げられていたように覚えています¹。当時深谷さんは、皆が TeX を使うという流れに抗って、Nisus Writer というソフトで論文を書いておられました。私が TeX で書いた草稿も深谷さんに Nisus Writer で打ち直して頂きました。Nisus Writer を使われたいたからか、深谷さんは海外出張にプリンターも持参されていました。論文の完成までには何度も草稿を印刷するので、プリンターを酷使したためか、その後故障して使えなくなってしまったそうです。消耗品として購入したプリンターが本当に消耗品になってしまったと言っておられました。その後、Yong-Geun Oh さん、太田啓史さんと 4 人で本を書きましたが、さすがにその時は TeX で書くことになりました²。この本を書くときにも深谷さんは猛烈なスピードで多くの部分を書かれました。最終版を作るために細部まで 4 人で検討したのは楽しい思い出です。色々な共同研究もまだまだ続いているので、それらについてはまたどこかで紹介できるかもしれません。

話は変わりますが、以前に次のようなことを言っておられました。「Riemann 幾何学を研究していたときには、一度出来たと思った主張の証明に間違いが見つかると直せないことがよくあった。Riemann 多様体は wild な対象であり、そういったものに一般に成り立つことはそうそうないだろうから議論に穴があった時には修正することがなかなかできなかった。洗練された分野では、それまでの蓄積を自分のものにするのは難しいこともあるだろうが、何かが成り立つを見切ることができたときには、後で議論に穴を見つけても何とか修正できるよ

¹「双曲幾何」のコラムに書くトピックにこんなことを書こうと思っているなどと話されていた記憶があります。

²しかし我々は AMS-TeX で書いたために、出版社から Section の番号付けの仕方の変更を求められたときには、定理や式などの番号を一つ一つ手で直し、文中での引用がきちんと行われているかをチェックするというもう 2 度とやりたくない作業をする羽目になりました。

うに思う。」³ご自身は、Riemann 幾何学からゲージ理論、Floer 理論とミラー対称性と研究対象を広げられ、今の研究は後者のような印象を持たれてのご発言かと思います。深谷さんが仰ったことについて、私にはなかなか本当にそうなるのかわからないことも度々ありますが、後になってみると本質的には深谷さんの主張が成り立つことがほとんどです。中には細かな部分を詰めてゆくうちに私にはかなり綱渡りの議論なのではと思われる箇所も出てきて、「下品な数学」に足をつっこんだかと思うこともあるのですが、深谷さん如何でしょうか？

つまらないことばかり書いてしまいました。この春に Simons Center に移られてからもご健康にはお氣をつけて益々ご活躍ください。

³言葉だけを聞くと誤解されてしまう虞がありますが、前者を「下品な数学」、後者を「高貴な数学」と言っておられました。ここでの「下品」は悪い意味で使われているのはありません。